

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：37503

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530597

研究課題名（和文） 地域 をめぐる活動 / 運度に関する現代的意味についての研究

研究課題名（英文） Research on the contemporary meaning of the activities and movements about the "region"

研究代表者

清家 久美（SEIKE KUMI）

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・准教授

研究者番号：00331108

研究成果の概要（和文）：構造論的意味論の視点からは Z. Bauman のいう近代における「脱埋め込み」から A. Giddens の主張する「自我の再帰的プロジェクト」を通して、U. Beck の提案した「再埋め込み化」の過程で、伝統概念やそれに付随する地縁や「身なし」の土地観の共有、食べもののルーツの顕在性、具体性、対面性などのデータベースを選択する人々が地域活性化の活動や運動をおこなう理由の一つであることが明らかになった。特に新潟の NPO 法人かみえちごは、概念としての小さな集落を「クニ」と呼び、地域単位の社会構想を提示している。その一つは小さな集落における人々の労働 / 仕事のあり方であり、NPO との協同による職人集団＝建具協同組合は、それぞれが本来持っていた職人としての失われた誇りを回復し、よい労働状況を可能にしている。

研究成果の概要（英文）：It has been demonstrated that those people who chose the database of traditional concepts elect to participate in activities and movements that aim to revitalize the region through Z. Bauman's "de-embedded" modernity, A. Giddens' "project of self-return", and on to U. Beck's "re-embedded" process. The NPO Kamiechigo calls the concept of a small community a "kuni", and propose that the region as an unit be viewed as a social body. One example is the revision of how labour and work in a small community are perceived. With the cooperation of the NPO, a group of specialist workers have formed a union and are striving to recover their pride as specialist workers and to create better working conditions.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2010 年度 | 1,200,000 | 360,000 | 1,560,000 |
| 2011 年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2012 年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,300,000 | 990,000 | 4,290,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：地域・運動・NPO・協同組合・伝統的職人・労働疎外

1. 研究開始当初の背景 | 指向から、環境・経済活動・社会的活力を兼ね備えた地域社会の豊かさ実現と <ま
バブル経済崩壊後、経済的繁栄や規模拡大

ちづくり>の主導形態が行政独占ではなく、地域住民や企業など多様な主体に分担され、それぞれが補完的役割を担う地域社会システムへの変換 という2点を背景として<まちづくり>の形態は大きな変容を見せている。しかしいずれにしてもその研究領域において経済活性化や地域マネジメントの視点が強く見られる傾向にある。

研究代表者の清家は、平成17 - 19年度「持続可能な地域環境システム構築のための地域づくりに関する研究 - 地元学とKJ法融合(研究代表者:清家久美)」の中で、国内に見られる地域活性化の活動について、それがどのようにおこなわれているかについての研究をおこない報告書を提出した。その中で、現在、いくつかの経済活性化のみを目的とした動きとは異なる、運動的側面をもった地域づくり、地域活性化の動きが見られることがわかった。本研究ではそうした運動性、あるいは思想性をもった動きがその対象となる。特に対象となるのは、「地元学ネットワーク」「NPO法人かみえちご山里ファン倶楽部」協働組合ウッドワークである。

「地元学」による地域づくりを試みている地方自治体数はここ数年軒並み増加している。この手法は民俗研究家の結城登美雄氏や水俣市の再生実現を可能にした吉本哲郎氏がその具体的方法を展開している。「地元学」において地域づくりのための最も重要な要件は つくる主体がそこに住む住民であること 地域、ならびに地域の個性を把握すること、とりわけ地域の風土と住民の生活という2点を中心に調べることから始めるということであり、 の地域を知るための手段としては外部地域の人々のまなざしを借りる。これはいわゆる観光人類学等で議論される「自己の客体化」すなわち自己の想定する他者のまなざしを媒介に自己像を構築する過程を有し、実際に地元の人と外部の人との協同によって地元を調査していくという方法を採用。地元がどのような風土・環境なのかを調べ、風土を生活にどのように取り入れるかを考えていく方法である。また確かに生活環境から人々の暮らしを読み解くことの可能な<解読者>が地元の人との協同によってその土地を数日間見ることにより、地元の「よさ」を引き出し、それによって地元の主体者に運動の動機と自信をインタラクティブに与えることが可能である。ここの地元学の背景的思想としていくつかの側面が見られる。特に、「ここに生きる」という土地に対するあり方 現場を自分の目で見て歩いて調べるということ。つまり常に抽象化せずに、具体の中で考えるということは顕著に見られる特徴である。この特徴は、本研究の中において取り上げられる対象に共通してみられる傾向である。NPO法人かみえ

ちご山里ファン倶楽部の代表の関原氏は地域杉間伐材の高付加価値家具の開発、NPO産地認証などをてがけ、そこから派生するかたちで、中山間地の過疎集落活性化NPOを立ち上げた。つねに具体的現場での活動を通して、表層的な活性化ではなく、その土地の「まかない力(自給性へ向かうベクトル)」を機軸とし、コミュニティと乖離しない地域資源産業を含んだ、新たなかたちの村落集合体「クニ」を提案している。関原氏のさまざまな展開の中には、また「地元学」に共通する発想が顕著に見られる。また、その他の活動もここでは詳細にあげていかないが、地元学に見られる共通性、類似性が認められる。

地域活性化についての研究領域では、マネジメント的側面や経済的あるいは組織的側面からの研究、また農村社会学においては、農村の問題系の中で論じられ、本研究の問題はほとんど扱われてこなかった。こうした問題領域は、一般に社会運動論や現代社会論のある問題系の中で扱われている。

社会運動はなぜ起こるのか。社会運動研究における様々な問いの中でも、この問いは最も基本的かつ重要な問いである。社会運動が人間による行為がひきおこすものである以上、こうした問いは次の問いと同義である。すなわち、なぜ人は多くの行為選択肢の中で、こうした活動や運動という行為を選択するのか。それは一体どのような条件下においてなのか。社会行為論としての社会運動論が最も難しく、最も魅力的な問題は、社会的構造的な諸要因が、どのようにすぐれて個人的な行為に結びつくのかということをつまらかにすることである。運動研究の歴史とは、構造と主体の関係性を探求することが中心的問題の一つであった。

2. 研究の目的

そうした研究的背景において、現在なぜ 地域 をめぐる動きが非常に顕著なのか、どうして人々は 地域 に関わる活動/運動をするのか。こうした問題を、インタビュー等の質的調査をおこなうことによって、それぞれの行為主体の意識やその背景にある価値観を抽出することにより考察していく。

また同時に考えられなければならない問題は、上記した「構造」からの視点である。すなわちここでは現代社会論的視点の導入である。たとえば、介入主義段階から新自由主義へと向かい、グローバルな市場経済のある傾向に対するリアクションとして、都市において反グローバリズム的な多くの運動が見られる。そうした背景の中で、農村地域への移住や農村地域で自給自足的な行き方の選択が少なからず見られる。このように社会構造との関係性の中で、地域をめぐる動きに関わるということも可能な解答であるかも

しれない。あるいはギデンスによれば、「ハイ・モダニティ」である現代において、再帰性はさらに進み、自己を確認するために再帰的に再構築されなければいけない。しかし多様な状況的選択を再帰的にこなうことによって自己を確認するプロセスは決して容易なことではなく、個人が無意味な存在とされてしまう脅威をそれぞれがもつことになるといふ。そうした脅威への集合的な対応として新たな集合行為や共同体を求めることになる (Giddens, A, 1991 *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*)。ギデンスはそうした小集団は伝統的な地域社会とは異なる「コミュニティの感覚」をつくり出し、コミュニティの再生を要請するという。このように現代におけるコミュニティの崩壊は、個人化の進行と共に新たなコミュニティを求め、創造されつつあるとも考えられる。それが、現在見られる地域をめぐる動きに何らかの関わりがあることも予測される。以上のような西洋の研究者による現代社会の個々のあり方についての議論は多く論じられており、そうした現代社会論的な視点は本研究において考察の際に援用される理論的視点となる。

しかし一方で日本人の土地意識や風土に関わる意識の特殊性は、哲学者の和辻哲郎や宗教学者の山折哲雄らによって提出されている。以上のように、国内に見られる地域をめぐる動きが、どのような現代的意味を持つのかについて、質的調査による活動に関わる人々の意識を考察することによって、その行為選択の理由を、現代社会論や日本における固有のなんらかの思想等から考察することが本研究の内容である。

地域をめぐる動きは、基本的には農村社会学やNPO論において論じられてきたが、その動きにおける主体的な意識と社会構造の関係性は社会運動論や現代社会論において議論されてきた。社会学における主体と構造に関する理論的研究の蓄積は多々あるが、そのほとんどは社会構造から論じるものであり、主体意識から考察する視点はほとんどみられない。さらに、日本の思想や宗教等を考察の対象とする融合的な研究もほとんど見られない。この研究の深化は、なぜ運動がおこるのかについての日本的視点が導入された研究をも提案してくれるだろう。

3. 研究の方法

本研究において文献調査とフィールド調査が必要となる。文献調査においては、地域づくりに関する文献研究 現代社会論に関する文献研究 社会運動論に関する文献研究 日本の思想/哲学/宗教に関する文献研究 NPO/NGOに関する文献研究 おおまかに分けて5つの分野の文

献研究が必要とされる。それぞれの分野における、理論的検討と総合がおこなわれる。また対象となる地域でのフィールド調査が必要となる。新潟のNPO法人かみえちご山里、各地域で展開される地元学の手法を用いての地域活性化の活動等においてインタビュー等の質的調査をおこない、それらをデータ化し、分析していく。

4. 研究成果

NPO法人かみえちご山里ファンクラブや地元学ムーブメントについて調査研究をおこなう中で、Z. Baumanのいう近代における「脱埋め込み」からA. Giddensの主張する「自我の再帰的プロジェクト」を通して、U. Beckの提案した概念である「再埋め込み化」の過程で伝統概念のデータベースを選択する人々が地域活性化の活動や運動をおこなう理由の一つであることが明らかになった。特に新潟にあるNPO法人かみえちご山里ファンクラブで展開される活動はさらにそれ以上の結論を導き出す非常に興味深い対象となったが、彼らが主張する中に、概念としての小さな集落を「クニ」と呼び、人間の対面的な社会構想が活動の背景としての思想に見られ、一部は現実的成功を収めている。

その一つは小さな集落における人々の労働/仕事のあり方である。彼らは小さな集落において、対面的関係の中で非常に充実した労働をおこなっている。特にNPOとの協同による職人集団=建具協同組合ウッドワークは、それぞれが本来持っていた職人としての失われた誇りを回復し、近代化以降変化を余儀なくされた社会の生産システムにおいて倒産が避けられない状況にあった多くの建具商店が地域のNPOと連携して地域に関わる仕事を作り出し、現在は安定的状況を取り戻していることがわかった。

もう少し詳細を説明すると以下のようである。現代における「伝統的職人仕事」をどのように考えることが適格的なのかという問題意識から出発する。この問題を考えていくために、伝統的職人をとりまく制度と制度下における彼らの経験、そしてその過程における意識や身体性の変容に焦点を当てた。すなわち、職人たちはそもそもどのような意識や身体性を持っており、近代化、あるいはそれ以降の制度下においてどのような意識や身体性が作られ、それがどのように変容していったかを考えていくわけである。本研究において研究対象となるのは建具協同組合ウッドワークである。近代化における機械導入や大量生産は伝統的仕事の産業構造の内に占めるその割合を大幅に減少させた。多くの職人の仕事は機械にとって代われ、製造における全過程の一部となっていった。職人仕事の衰退が自明になる中、本論で扱う協同組

合ウッドワークは集団独自の方法で、結果として近代化以前に存在したと考えられる職人仕事を回復し、そのことが総じて現代における伝統的仕事の可能性を生み出していると考えらる。もちろん、彼らもある時期において、近代化のプロセスを経験しなかったわけではない。おそらく他の伝統的仕事同様に、制度下における仕事の質の変化は余儀なくされた。機械に取って代わられたがゆえに、仕事自体が減少、あるいは衰退し、また温存された仕事も分業としての部分的労働にならざるを得なくなったわけである。そうした状況から、どのように自らが「満足する」伝統的職人仕事を回復していったのだろうか。

この問題を考えていくために、本研究ではヘーゲルから初期マルクスに続く思想展開の中で提出された「疎外」概念の援用を試みる。この概念は、建具職人が近代化、あるいは近代化以降に制度下において経験したことによる意識や身体性の変容を説明するのに非常に有効であると考えたからだ。近代化の過程において、彼らは「労働疎外」され、そして上記した自らが「満足する」職人仕事の回復は、まさに「脱疎外」された状況になったということを意味する。整理すると、「労働疎外」された職人仕事は、どのように「脱疎外」されて、彼らの「満足する」職人仕事の回復になっていったのかという問題を考察した。

資本主義経済制度下において、工務店のもとで大量生産品を作る過程でそれを意識化、身体化することによって職人仕事は疎外労働化されていく。すなわち先行研究に見られるそもそも職人が持っていた自然対象物の固有価値を生かし、技を磨き、構想を練り、手仕事をする、あるいは固有価値をあらたな価値に創造する構想力、自らの技能に対する自信と責任、そして誇り等がすべて希薄になってしまった。協同組合ウッドワークにも同様の傾向が見られる状況下で、彼ら独自の取り組みをおこなう。市場社会における販売ルートとは異なる消費者への直販 工務店等の下請けという関係的位置づけ 隷属的關係を排除し、全工程を自らの仕事にすることによっての構想力回復 協同組合における利益の共有だけでなく、負債の共有を内規として義務づけ、すなわち「占有の様式」の独自性の共有 製造権認定制度における木取り実施による技能や創造性の回復 自ら全ての工程をプロデュースすることによって、間伐材利用など、地域活性化を目的とするNPOとの協働による付加価値の創出など、これらの過程において彼らは「脱疎外」されていったと結論づけた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文](計5件)

清家久美 「伝統的職人仕事における労働疎外化と脱疎外プロセスについて 協同組合ウッド社の事例研究」『社会システム研究』査読有り, No26, pp.151-200.2013.

EADES Jeremy S. "East Asia" in J. Carrier (ed) A Handbook of Economic Anthropology, London: Edward Elgar (2nd edition) 査読なし pp542-552, 2012.

EADES Jeremy S. "Anthropology, political economy and world-system theory," in J. Carrier (ed) A Handbook of Economic Anthropology, London: Edward Elgar (2nd edition) 査読なし pp26-40, 2012.

EADES Jeremy S. "The emerging socio-cultural anthropology of emerging China," in R. Fardon et al. (eds), The SAGE Handbook of Social Anthropology vol 1, London: Sage 査読なし pp405-421, 2012.

EADES Jeremy S. (with Malcolm Cooper) "Soldiers, victims and neon lights: The American presence in post-war Japanese tourism," in R. Butler and W. Suntikul (eds), Tourism and War, London: Routledge. 査読なし pp205-218, 2012.

[学会発表](計2件)

清家久美 「地域をめぐる活動/運動についての構造論的・思想的研究 言説にみられる社会構想についての考察」日本社会学会第83回年次大会, 2010.11.名古屋大学(名古屋)

清家久美 「NPO活動/運動にみられる<共>と<個>のあり方についての研究」日本NPO学会第12回年次大会, 2010.3.立命館大学(京都)

[図書](計1件)

竹沢尚一郎 『被災後を生きる 吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』中央公論新社 2013

6. 研究組織

(1)研究代表者

清家 久美 (SEIKE KUMI)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学

部・准教授
研究者番号：00331108

(2)研究分担者(2010-2011)
イーズ ジェレミー (EADES JEREMY)
立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学
部・教授
研究者番号：80232106

(3)連携研究者
竹沢 尚一郎 (TAKEZAWA SHOICHIRO)
国立民俗学博物館・教授
研究者番号：10183063